

# 熊毛地区社会教育委員だより

令和4年2月発行  
熊毛地区社会教育  
委員連絡協議会

## 熊毛地区の更なる社会教育の発展に向けて

熊毛地区社会教育委員連絡協議会  
会長 塩崎 義政

思いもよらない新型コロナウイルス感染症の大流行により、私たちの生活は大きく変化し、2年が過ぎた。我々の社会教育・公民館活動も大きく方向転換を余儀なくされた。多くの行事が中止となり、大人数が集まる行事やイベントは、ことごとくなくなった。飲みニケーションもなくなった。

社会教育・公民館活動とは、人が集い、共に語り、密になって活動していくものと承知してきた。それが今は、密を避けなければいけない状況である。

私が区長を務める上西校区でも、多くの行事が中止を余儀なくされた。活動の可否について、校区住民と協議を重ねてきたが、高齢者も多い中、慎重にならざるを得なかった。

それでも、社会教育の灯を消すことなく、新しい生活様式に留意しながら、出来ることを工夫して活動を進めるためには、これまで培った社会教育活動のスキルと熱い思いを、この逆境だからこそ、発揮していかなければならない。

そうした中で、増えているのが「オンライン〇〇」。私も数回、オンライン会議を経験した。集まることなく、協議や研修ができる画期的な方法である。コロナ禍はもちろん、熊毛地区にとっては、海が荒れた場合でも活用できるツールは心強い。しかし、である。なんとなく、話に微妙な間があり、スムーズに会話できないのである。併せてマスクをしているため声も聞きにくく表情も捉えにくい。やっぱり、人とは実際会って話をしたい。

今後の感染状況は不透明だが、この期間で活動の英知を蓄え、力を温存し、晴れて活動できた暁には、これまで以上に、熊毛地区が一致団結して活動を再開していきたいものである。



令和3年度熊毛地区社会教育委員等研修会  
事例発表の様子

## 地域文化事業の進化

西之表市文化協会  
会長 吉原 三保子

新型コロナウイルスによるパンデミックも第5波が一応収束、緊急事態宣言も解除されてひと息ついているところに今度は新変異ウイルス、オミクロン株が出現、第6波に十分注意したいところである。私たちはこの2年、コロナ禍により生活の多くの面で制約と自粛を強いられてきた。しかし、この逆境にあったからこそ人間のしたたかさというものが逆に感じられた時期でもあった。

熊毛地区文化協会、西之表市文化協会も文化の祭典、各部門のイベントなど、残念なことであったが今年度も中止を決定。一方、本市では、4件目となる国の有形文化財に「遠藤家住宅主屋」が決定。また昨年度は、鉄砲館において「上妻家文書展」を開催。わが国最古級の「夫婦肖像画」、それに時堯公の槍の許状等を公開、県内外より多くの注目を浴びた。

今年度11月には、種子島火縄銃保存会設立50周年記念事業として、火縄銃大会が開催され、紀州、堺等、5団体が参加し、各団体の迫力ある演武が披露された。歴史ある伝統がこれからも大切に引き継がれて欲しい。

また、種子島は、民俗芸能の宝庫といわれる程、数多くの芸能が各地域に残されてきた。本市には県及び市指定する無形民俗芸能が18もあり、継承されている。しかし、過疎化が進み、踊り手の減少や生活様式の変化などで年々その数は減少しつつある。先人の残した文化を後世に伝えていく、保存していくことは困難も伴うことながら、これからの重要な課題である。

一方、本市広報誌「市政の窓」では、市民が郷土の歴史や文化・文芸に親しむ機会を与えてくれている。市指定文化財天然記念物の「ヤッコソウ」、「黒潮アートの港町」を紹介、市街地商店街の壁をギャラリーとした、市民と芸術家たちの木彫作品「おさかなアート展」は、市民と行政が一体となった企画で、今や街の風景なじみ、想像力豊かな近代アートを生み出している。

令和4年は新型コロナウイルス感染症で1年延期されている西之表市文化協会設立50周年記念文化祭を盛大に開催したいと考えている。新型コロナウイルス感染症の収束を念じつつ、平和で豊かな歴史と文化の薫る地域社会への進化に向けて今後も取り組んでいきたい。

## 地域とともにある学校づくりをめざして

屋久島町小・中学校長会  
会長 古里 和彦

国が平成30年6月に定めた「教育振興基本計画」において、「人々の暮らしの向上と社会の持続的発展のための学びの推進」が目標の一つに掲げられています。その中で、「住民一人一人の人生を豊かにする学習、少子高齢化・人口減少など地域が直面する課題の解決や地域活性化のための学習などを推進し、新しい地域づくりなどの活動につなげていくため、社会教育行政の在り方について具体的な検討を進める」こと、『学びの場』である社会教育施設を拠点に、活力ある地域コミュニティ形成のために実施される各地域の課題解決・地域活性化の取組を推進することにより、学校や地方公共団体の関係部署のみならず、NPO、民間教育事業者等の多様な主体とのネットワークづくりを促進すること、「ボランティア等、多様な主体が参画し、人づくりや地域づくりを支援する様々な取組を促す」ことなどが謳われおり、社会教育を基盤とした人づくり・つながりづくり・地域づくりの重要性は地方行政全体を通じてますます大きくなっていきます。

例えば、令和2年度かごしま地域学校協働活動リーフレットを見ると、期待される子供の効果として「規範意識や自尊感情、コミュニケーション能力が高まる」「地域への関心の高まり、郷土愛が育まれる」、期待される学校への効果として「よりきめ細やかな教育」「教員が教育活動により一層力を注ぐことができる」、期待される地域への効果として「地域住民の自己実現や生きがいづくり」「地域の活性化や、学校を核とした地域づくり」などがあり、地域と学校が協力することでお互い高い教育効果を発揮します。

先日、小中合同研修会があり、その中で、かごしま地域学校協働活動について少し話をしましたが、先生方が知らなかったことに驚かされました。どの学校でも、地域の人材を活用した教育活動は行っていると思っています。また、熊毛地区は青年団活動も活発で、より小・中学生に近い存在なのではないでしょうか。地域の中で支え合っていくためにも、地域とともにある学校づくりをめざすためにも、組織や活動が見える化されることが大事だと感じています。



【岳南中学校】  
地域の方に足こぎ脱穀機の使い方  
を習う様子

## 子ども会活動の価値

屋久島町教育委員会社会教育課  
統括係長兼社会教育主事 草野 貴亮

先日、町いじめ問題対策連絡協議会へ出席した。その中で、「最近、内を見る子が増えている傾向にあるように感じる。ふとした友達の様子から『自分が、いやなことを言われているのではないか、思われているのではないか。』と考えるしまうなど、人の目が気になり、マイナスにとらえてしまう子が多い。」という話題があった。このことが、「自分はいじめられている。」と感じることにつながっている場合もあるということだ。この背景には、昔と比べると、子供たちの生活体験の不足が一つの要因となっているのではないかと、という話にもなった。

本町には35の単位子ども会があり、毎月第3土曜日の「青少年育成の日」を基準日として、それぞれの子ども会が活動を行っている。この日には、中学校の部活動も休みとし、中学生も活動に参加しやすいように学校も協力している。活動実施報告書を校区の小・中学校、教育委員会で回覧することで、どのような活動を行ったのかを共有している。地域清掃活動や空瓶回収、レクリエーションや研修会等、各子ども会が工夫を凝らし、子供たち自身が主体的に活動する子ども会活動が展開されており、様々な生活体験がそこにはある。子供自身が企画、立案、準備をすることで、子供同士のコミュニケーションをとる場面が必然的に生まれている。

子ども会活動は、子供同士のよりよい人間関係を築くために大きな役割を果たしている。それは、いじめをなくす基盤づくりへとつながっているのではないだろうか。子ども会活動の価値を再認識し、今後の活動も支え、見守ってきたい。



【子ども会レクリエーション活動】

## 油久小学校開校150周年を迎えて

中種子町社会教育委員連絡協議会  
副会長 赤坂 正清

今年（令和3年）、中種子町立油久小学校が開校150周年を迎えました。明治4年に創立され、明治・大正・昭和・平成・令和の時代とともに地域の拠点として成長・発展し、歴史を刻んで参りました。

油久小学校の校門には、「よか馬は風に向かって立つ」と書かれた大きな看板があります。この言葉はどんな時代や環境におかれても、積極的に生き抜く知恵と気力、体力を備えた、たくましく凜とした姿を指します。児童は、毎日この言葉に背中を押されながら登下校します。

私たち油久校区では、令和元年に実行委員会を発足し、記念事業としてピオトープ改修、記念誌作成、門柱看板製作、高木伐採、倉庫修理、グラウンド内タブの木剪定、記念式典を実施しました。昨年から引き続く新型コロナウイルス感染症の影響で事業内容の変更、規模縮小を余儀なくされました。

令和3年11月に開催した記念式典では、油久小学校児童による学童疎開の劇やお祝いの言葉が披露され、大変、感動しました。少子高齢化の影響で昭和30年代には200人以上いた児童も、現在では21人、学級数4学級、PTA戸数14戸となり来年度以降もさらに減少していく見込みとなっており、大変厳しい状況となっていきますが、児童には油久小学校の伝統を継承してほしいと思います。

開校記念事業を実施するにあたり、校区民・PTA・先生方・卒業生など多数の皆様方に御支援をいただき、感謝申し上げます。また、実行委員会の皆様には、準備期間を含めると4年間にわたり活動していただき、大変お疲れ様でした。

今後とも、校区と学校がともに児童を見守り育む地域づくりを目指して努力していきます。



【油久の歴史「タブの木」寸劇】

## 「これまで」と「これから」

中種子町連合青年団  
団長 西田 賢志

昭和21年に設立された中種子町連合青年団は今年（令和3年）で76周年を迎えました。

そもそも青年団のルーツは室町時代あるいはそれ以前までさかのぼると言われています。江戸時代には集落ごとに若者衆、若連中、若衆組などと呼ばれ、集落における祭礼行事や自警団的活動など、村の生活組織と密着した自然発生的な集団であったとされ、現在では、郷土芸能継承、社会教育事業のボランティアスタッフなどを中心に活動しています。

令和2年には、青年団のメインイベントである「ちびっこフェア」をコロナ禍ということもあり、「おうちでちびっこフェア」と称し、TAC（種子島アクションクラブ）全面協力の下、YouTube上でタネガシマンの動画を配信したり、塗り絵のお面を配布したりと、規模縮小ながらもなんとか開催することができました。

令和3年5月には、親子ふれあいウォークにボランティアとして参加しました。残念ながら宿泊なしで1日のみの行程となりましたが、西之表港から種子島中央体育館までの、28.4Kmという大人でも音を上げるような距離を、小さな身体で一步一步前進していく、強くたくましい姿が印象に残ります。また、感想文には、子供ながらの視点で感じた種子島の自然や、新たな発見などについて書かれており、好奇心や探究心、郷土愛などをいつまでも大切にしてほしいと感じました。同時に私たち大人が忘れていたものを、思い出させてくれたような気がします。

今後も様々な社会活動を通じて、活動の楽しさや達成感を実感するとともに、子供たちのために地域課題等に向き合う経験を積むことが、青年団の成長とその後の社会教育活動につながると考えています。



【タネガシマンぬりえお面】

## 婦人部活動のこれから

南種子町公民館婦人部連絡協議会  
副会長 長田 かおり

私たち公民館婦人部は、南種子町内の8地区の婦人部をもって組織されており、心豊かな地域社会の創造の為に、地域活動や研修活動に取り組んでいます。

また、明るい家庭と活力ある郷土づくりに寄与する為に、会員相互の親睦と会員の資質の向上を目的に、448名の会員で活動をしています。

一昨年からの新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、今年度に計画していた活動も新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、女性スポーツ大会等の行事がなくなり、活動ができていないのが現状です。

さて、女性の社会進出がささやかれる時代になってきておりますが、本町の実情は、子育て・介護等、様々な事情により、なかなか参加できない、役員への成り手が見つからないということが今まで長年の課題となっていました。実際に、会長職となりますと、行政のあらゆる会の役員として、充て職が多いことが負担になっているのではないかということになりました。

そこで、役員になりやすい体制作りも必要ではないかということから、会長の担う役を洗い出し、役員で専門部ごとに振り分けを行い各種会議の役員は婦人部代表とすることにより、会長の任務の軽減につながりました。各種団体の御理解や御協力もありスムーズに移行できました。これから、新たな婦人部活動がスタートできるのではと考えております。

世代間交流を図りながら、公民館婦人部活動を充実させ、参加しやすい体制・リーダーになりやすい体制を作っていくことで、婦人部活動の充実を図っていかれたらと思います。

## P T A 活動を通して

南種子町P T A連絡協議会  
会長 戸川 雄太

8つの小学校と南種子中学校、種子島中央高校の南種子部からなる、南種子町P T A連絡協議会は、急激に変化する社会情勢や生涯学習時代に対応して、一人一人を大切に、心豊かでたくましい青少年の育成を図るため、全会員が総力を上げ組織的、計画的、継続的な活動を家庭、学校、地域がそれぞれの果たすべき役割を確認し合い、P T Aが中枢となって連携のきずなを深められるような活動を行うことを運営方針として活動しています。私たちも本来であれば、今年度はスポーツ大

会(ミニバレーやゲートボール)を行い、他小学校の保護者や宇宙留学の里親さん、家族留学の方々との交流を深められるはずでしたが、感染症拡大防止の観点から中止としました。

他学校の会員の交流の場が無くなることは本当に残念でしたが、各単Pで感染症対策を十分に取って、地域、学校と連携を取りながらできる活動を行いました。

できる事は何かを会員同士で話し合い、子供たちの為に何が出来るのか?どうやって保護者同士の繋がりを深められるか?このような状況で地域とどうやって関わっていけばいいか?など今まで長年続いているP T A活動を受け繋ぐ形だったことが、様々なアイデアを出し合い、より良い活動にしようと思われつつあります。

子供たちも新しい生活様式に慣れてきて、保護者、地域もそれぞれ順応してきて、自分たちで何が出来るかを考え、そこに向かって協力し合う。まさにP T C A (Parent Teacher Country Association) 活動ができていないかと思えます。

少しずつではありますが、以前のような日常に戻りつつある中でも不安は残っています。こんなとき、子供たちの笑い声が響き渡れば、明るくなります。子供たちの健全な育成ができるように啾啄同時、ヒナが中から、親が外から協力して殻から出るように、家庭、学校、地域、関係各所と連携を取り、「すべては子供たちの為」を根っこに持ち、これからも活動していきたいと思えます。



## おわりに...

令和3年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で様々な行事や活動が中止や規模縮小になりました。その中でも、記事を提供してくださった各団体の皆様に深く感謝申し上げます。令和4年度もコロナに負けず、充実した社会教育活動を推進してまいりましょう。

### 【編集・発行】

熊毛地区社会教育委員等研修会事務局

住所 西之表市西之表7590番地

熊毛教育事務所内

電話 0997-22-0535

FAX 0997-22-0521